

かすかな声
太宰治

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 抛《よ》って

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) 妥協したい[# 「したい」に傍点]

信じるより他は無いと思う。私は、馬鹿正直に信じる。ロマンチズムに抛《よ》って、夢の力に抛って、難関を突破しようと気構えている時、よせ、よせ、帯がほどけているじゃないか等と人の悪い忠告は、言うもので無い。信頼して、ついて行くのが一等正しい。運命を共にするのだ。一家庭に於いても、また友と友との間に於いても、同じ事が言えると思う。

信じる能力の無い国民は、敗北すると思う。だまって信じて、だまって生活をすすめて行くのが一等正しい。人の事をとやかく言うよりは、自分のていたらくに就《つ》いて考えてみるがよい。私は、この機会に、なお深く自分を調べてみたいと思っている。絶好の機会だ。

信じて敗北する事に於いて、悔いは無い。むしろ永遠の勝利だ。それゆえ人に笑われても恥辱《ちじょく》とは思わぬ。けれども、ああ、信じて成功したいものだ。この歓喜！

だまされる人よりも、だます人のほうが、数十倍くるしいさ。地獄に落ちるのだからね。

不平を言うな。だまって信じて、ついて行け。オアシスありと、人の言う。ロマンを信じ給え。「共栄」を支持せよ。信ずべき道、他に無し。

甘さを軽蔑する事くらい容易な業は無い。そうして人は、案外、甘さの中に生きている。他人の甘さを嘲笑《ちょうしょう》しながら、自分の甘さを美德のように考えたがる。

「生活とは何ですか。」
「わびしさを堪える事です。」

自己弁解は、敗北の前兆である。いや、すでに敗北の姿である。

「敗北とは何ですか。」
「悪に媚笑《びしょう》する事です。」
「悪とは何ですか。」
「無意識の殴打です。意識的の殴打は、悪ではありません。」

議論とは、往々にして妥協したい[# 「したい」に傍点]情熱である。

「自信とは何ですか。」
「将来の燭光を見た時の心の姿です。」
「現在の？」
「それは使いものになりません。ばかです。」

「あなたには自信がありますか。」
「あります。」

「芸術とは何ですか。」
「すみれの花です。」

「つまらない。」
「つまらないものです。」

「芸術家とは何ですか。」
「豚の鼻です。」
「それは、ひどい。」
「鼻は、すみれの匂いを知っています。」

「きょうは、少し調子づいているようですね。」
「そうです。芸術は、その時の調子で出来ます。」

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年6月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

初出：「帝国大学新聞」

1940（昭和15）年11月25日発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。